弘前大学教育学部附属教育実践総合センター
研究員紀要　第９号（通号第19号）：１～12（2011年３月）

高等学校日本史の単元開発研究

－ 解釈批判学習と討論学習からのアプローチによる地域史学習 －

金子勇太　青森県立五所川原高等学校

要旨

現在の高校における歴史教育は、教科書に記載されている学問的解釈を唯一の真理であるかのように一方的に教授する「閉ざされた歴史認識」の形成に陥っている。また、通史学習が中心となり、地域史の観点から日本史を考察するという試みも少ない。このような状況を踏まえて本研究は、学習者が自由に自分なりの歴史像や歴史観をつくることができる「開かれた歴史認識」の育成と地域史から日本史全体を考察させる単元開発の研究を行った。授業理論は解釈批判学習と討論学習の両論を融合させ、教材は「北の防御性集落」を取り上げた。そして、実験授業を行い、研究の有効性を考察した。その結果、生徒は歴史解釈を選択し、討論によって自ら選択した歴史解釈を吟味・検討することにより、歴史認識を高めた。また、「北の防御性集落」の歴史的意義について、通史の既習知識を応用させて自らの歴史観をつくりあげた。

【キーワード】開かれた歴史認識　地域史　解釈批判学習　討論学習　北の防御性集落

１．はじめに

高校における歴史の授業は、講義中心の知識注入型のものに陥りやすい。それは、教科書に記載されている学問的解釈を唯一の真理であるかのように一方的に教授するという授業である。このような状態では、学習者が自ら歴史を考えることがなく、無批判に学問的解釈を受け入れてしまう「閉ざされた歴史認識」を形成する授業となっていることを否めない。

本研究はこの「閉ざされた歴史教育」から脱却し、学習者が自由に自分なりの歴史像や歴史観をつくることができる「開かれた歴史認識」育成のための単元開発を第一の目標とする。このような研究は先行研究が膨大にある。例えば、高校日本史の先行研究として加藤公明氏の討論学習の実践[1)]や世界史での児玉康弘氏の解釈批判学習[2)]などである。この２つの先行研究を手がかりに単元開発を行う。

第二の目標としては、教材として地域史を取り上げ、そこから日本史全体を考察させることである。授業で学習する歴史は、通史学習であり、特に青森県の場合は地元の歴史を学ぶ機会はほとんどない。よって、通史学習と地域の歴史は乖離したものとして生徒は捉えがちである。地域史が決して通史と乖離したものではなく、相互に影響し合いながら、形成されたものであるということを生徒が自ら考えて認識できる授業を開発したい。

以上の２つの目標を達成すべく単元を開発し、さらに実験授業を通して考察する。

２．解釈批判学習と討論学習

２－１　解釈批判学習

解釈批判学習とは、児玉氏が提唱した授業論である。これは、歴史的事象に関する歴史研究者の複数の解釈や理論を教師が学習者に掲示し、どれが現時点で最も妥当なものであるかを学習者自身に批判的に吟味・検討させる。児玉氏は解釈批判学習の意義と根拠として以下の３点を述べている。第一に、複数の歴史解釈の教育内容化により、学習者自身の歴史観の確立を援助できる点である。第二に、歴史研究の科学性を歴史授業に取り込むことにより、学習者の歴史認識の科学性を高め、それを成長させる点である。第三に、複数の歴史解釈を学習者が比較し、その差異と背景を把握することにより、一つの歴史解釈とその背後にある歴史観から自らを解放していくことで開かれた歴史認識の育成を可能にする点である。

２－２　「考える日本史授業」

加藤氏の「考える日本史授業」は、学習者自身に歴史的事象を説明する解釈や理論を掲示させ、学習者間の相互批判の後、どれが現時点で最も妥当かを判断させる授業論である。この授業では、各単元のはじめに、事実をもって学習者の歴史についての通念や常識を否定または動揺させ、学習課題に対する疑問を持たせる問題提起の授業を行う。その意義としては、学習者自身が作った歴史認識をクラス内での討論学習を通じて、実証性、論理性、個性・主体性を内容とする科学的歴史認識の方法について学ぶことができるという点にある。

２－３　両論の共通点と相違点

児玉氏の解釈批判学習と加藤氏「考える日本史授業」の共通点としては、歴史学界で行われている歴史研究者自身の研究活動の方法を歴史学習に取り込むことで、開かれた歴史認識の形成を学習者に保障しようとしている点である。しかし、その一方で相違点もある。児玉氏は歴史研究者による主要な複数の歴史理論・解釈を教師が選択し学習者に掲示するが、加藤氏は学習者が最初に自身の歴史理論・解釈を作り上げ他の学習者に提示する。この相違は両者の歴史認識に対する批判性のとらえ方に起因する。児玉氏は批判性を科学性ととらえ、科学的な歴史認識の育成をめざすが、加藤氏は批判性を主体性ととらえ、主体的な歴史認識の育成をめざすという相違である。

２－４　両論の問題点

両論とも現在の開かれた歴史認識形成における授業論の先駆的実践であるが、問題点も指摘されている[3)]。児玉氏の解釈批判学習は、教師が選んだ複数の歴史理論・解釈を示すので教師によって学習者の認識形成がリードされ、加藤氏の「考える日本史授業」は、学習者自身が解釈を掲示し、学習者自身による相互批判であるため科学性に限界があるという問題点である。

２－５　解釈批判学習と「考える日本史授業」を合わせた授業構成の試み

本研究における実験授業では、解釈批判学習の教材開発理論と「考える日本史授業」の討論学習の両論を取り入れた授業を構成する。その理由は、第一に児玉氏の解釈批判学習のように教師が選んだ複数の歴史理論・解釈を示すだけの場合、生徒が熟慮することなく安易に解釈を選び、結局は「閉ざされた歴史教育」になる恐れがあるということ。第二に加藤氏の討論学習では、学習者自身が解釈をつくることが求められるが地域史(特に青森県の歴史)を主題とする場合、文献史料や考古学的資料が少なく、高校生ではオリジナルの解釈をつくることがかなり難解であるという理由である。

以上のような問題を解決するために、まずは教師が選んだ複数の歴史研究者による歴史理論・解釈から自らが支持するものを選び、次にその正当性を討論によって相互

批判することにより、生徒の「開かれた歴史認識」を育成することを目標とする。

３　地域史学習論としての「北の防御性集落」

現在の日本史教育において、従来の郷土史学習や地方史学習に代わる概念としての地域史学習論が提唱されている[4)]。郷土史学習が地域の独自性や個性ばかりを強調して閉鎖的な歴史教育に陥ってしまい、地方史学習が日本史全体との関連性を重視するがために一般性ばかりが追及され、地域の独自性を見失う傾向にある。そこで、地域独自の自立的発展を重視・強調しつつも、国内・国外から加わった影響や交流の視点も失わない学習論として地域史学習が注目されている。

本研究では、地域史学習論の概念に沿って、「北の防御性集落」を教材として選んだ。「北の防御性集落」の概要については後述するが、これこそ平安時代において北東北を中心に発生するという独自性とその発生原因について地域内外の影響や交流を踏まえて考察することが求められるという地域史学習として格好の教材であると考えた。

４．実験授業計画

４－１　主題の設定―北の「防御性集落」について―

10 世紀頃から北緯 40 度以北の北奥・道南地域に弥生時代、西日本を中心に見られた防御性集落が出現する。特に青森県内にその分布が集中しており、現段階でその遺跡数は約 100 箇所以上である。

これらの遺跡が「防御性集落」といえるのかという声も出た。その理由は、弥生時代のような「戦争の状況」を示す遺物が発見されていなかったからである。武器や外傷を伴った人骨などが弥生時代の防御性集落からは発掘されたが、それがなかった。よって、これは「防御」のための濠ではなく、「結界」、「権威の象徴」、「集団意識の高揚」のためのものだという説も出た[5)]。しかし、この後、林ノ前遺跡(青森県八戸市)から、殺害されたことが明確な多数の人骨や武器として利用されたと考えられる鉄鏃が多量に発掘された。これらは、この遺跡が戦闘状態にあったことを意味している。また、この遺跡は『陸奥話記』に記載されている「鉋屋・仁土呂志・宇曽利の三部」の長であった安倍富忠の居館とその集落ではないかと推定されている。安倍富忠は前九年合戦の際に安倍頼時と戦った蝦夷の族長と考えられている。以上から、やはり戦闘用に備えられた「防御性集落」とする見方が若干優位になっている。

問題はなぜ、10 世紀に北奥・道南地方が戦闘状態になったのかということである。この地域に住む人々の戦闘相手が誰だったのかを解明することが、この「防御性集落」の様々な謎を解く鍵となる。また、この他にも「北の防御性集落」には、多く問題がある。例えば、出現時期、遺跡の性格と構造、終焉理由などである。いずれも歴史研究者の間で現在も論争が続いている。

本研究では、この様々な議論の中から、「北の防御性集落」の出現理由をめぐる諸解釈を教材化することにした。その理由として、先に述べた地域史学習という視点から地域内外の影響や交流を踏まえて考察するには、これが最も適していると考えたからである。

４－２　目標の設定－「北の防御性集落」の出現理由の諸解釈－

現在、「北の防御性集落」の出現理由についての解釈は歴史研究者の間で多様であるが、大きく三つに分類することができる。それは、①「蝦夷社会内部抗争」説、②「受

領官(国守)の苛政への対抗」説、③「安倍氏・清原氏の北奥支配への対抗」説である。

①説は工藤雅樹氏・樋口知志氏らによって述べられている説[6)]であり、その根拠として蝦夷社会内部の社会発展により、富める集団と零落した集団との二極分解が遂行し、諸集団相互の利害衝突・対立が数多く発生したことをあげている。

②説は小口雅史氏によって提唱されたものである[7)]。その根拠は、摂関政治期に日本各地で頻発した国司による過酷な収奪が、北奥の地でも起こり、それに対抗したというものである。

そして、③説は三浦圭介氏や斉藤利男氏によって提唱されている[8)]。その根拠を当時、東北地方を統治していた鎮守府の在庁筆頭である「奥六郡俘囚長」安倍氏と秋田城在庁筆頭である「出羽山北俘囚主」清原氏が蝦夷と交易の管理・統制の重責を担い、結果として安倍・清原氏勢力との間に軍事的緊張が発生したことに求めている。ただし、三浦氏と斉藤氏ともに対安倍・清原氏という点は同じであるが、斉藤氏が安部・清原氏を中央政府の代理人として北奥の地を支配しようとしたという考えることに対し、三浦氏は安倍氏・清原氏は中央政府の代理人ではなく、むしろ北奥地域の人々は国府あるいは中央政府とは良好的な関係にあったと述べている。

以上の三つの解釈を生徒に理解しやすいように教育的加工したものを教材として利用して、生徒自身に比較検討させて、どれを支持するのか選択・判断させることを目標とする。なお、解釈を比較検討する際には、支持しない解釈についての批判・疑問点も考察させた。表１は、３つの解釈を整理して示したものである

表１　「北の防御性集落」の出現理由についての３つの解釈

出現理由についての解釈	解釈内容
蝦夷社会内部抗争	蝦夷社会内部の社会発展により、富める集団と零落した集団との二極分解が遂行し、諸集団相互の利害衝突・対立が数多く発生した。
受領官(国守)の苛政への対抗	摂関政治期に日本各地で頻発した国司による過酷な収奪が、北奥の地でも起こり、それに対抗した。
安倍氏・清原氏の北奥支配への対抗	東北地方を統治していた鎮守府の在庁筆頭である「奥六郡俘囚長」安倍氏と秋田城在庁筆頭である「出羽山北俘囚主」清原氏が蝦夷と交易の管理・統制の重責を担い、結果として安倍・清原氏勢力との間の軍事的緊張が発生した。

４－３　授業計画

①小単元「なぜ、平安時代の北東北に『防御性集落』が出現したのか」(４時間配当)

②小単元の目的

平安時代に出現した「北の防御性集落」についての諸解釈を比較・検討させることを通じて古代王朝国家と北方世界との関係とそこに見られる北方世界の変化についての認識を深めさせる。

③小単元の到達目標(解釈)

●蝦夷社会において、集団間の対立抗争が激化し、武力衝突も稀でない社会情勢の到来とそれに政府側が介入して集団間の対立抗争が激化したという「蝦夷社会内部抗争」説を理解する。

●日本各地で頻発した国司苛政上訴の背景となる過酷な収奪が、この北の地でもあったとする「受領(国司)の苛政への対抗」説を理解する。

●「北の防御性集落」の出現と同時期に北奥に勢力を誇った安倍氏と清原氏勢力

との軍事的緊張が契機となった「安倍氏・清原氏の北奥支配への対抗」説を理解する。

④小単元の構成

第一次(単元の導入)「北の『防御性集落』とはなにか」(１時間)

第二次(展開部１)　「蝦夷社会の内部抗争が出現理由か」
第三次(展開部２)　「受領(国司)の苛政への対抗が出現理由か」
第四次(展開部３)　「安倍氏・清原氏の北奥支配への対抗が出現理由か」　(1 時間)

第五次(展開部４)　「３つの解釈のどれが正しいか」
第六次(単元の終結)「『北の防御性集落』の古代東北における歴史的意義はなにか」　(2 時間)

⑤授業展開(対象：高校２年生　文系クラス３９名)

教師による指示・発問	資料	教授＝学習過程	生徒に習得させたい知識
〈導入〉			
●これは何の分布図か。	(1)	Ｔ：発問する Ｐ：調べる	●防御性集落の分布図。
●何時代の分布図だろうか。		Ｔ：発問する Ｐ：予想する	●平安時代中期のもの。
●本当に防御性集落と言えるだろうか。		Ｔ：発問する Ｐ：考える	(●防御性集落であるかどうかを考古学資料から検討してみる)
・防御性集落とは何か。		Ｔ：発問する Ｐ：考える	・弥生時代に発生した外敵からの侵入を防御するための集落。
・防御性集落と定義付けることができる条件とは何か。		Ｔ：発問する Ｐ：考える	・集落の周囲が濠で囲まれている環濠集落であることや山頂・丘陵上に集落が築かれている高地性集落である。
・これらの集落は、防御性集落の条件を満たしているか。	(2)	Ｔ：発問する Ｐ：調べる	・唐川城跡、中里城跡、高屋敷館跡の事例集から、濠の跡があることや丘陵上に位置していることがわかる。
・周囲を濠で囲まれていることや丘陵上に立地しているだけで、防御性集落と言えるのか。		Ｔ：発問する Ｐ：考える	・集落内に戦争状態を意味する人骨や武器の出土が見られなければならない。
・北の「防御性集落」で人骨や武器が出土した遺跡はあるか。	(3)	Ｔ：発問する Ｐ：調べる	・八戸市の林ノ前遺跡から、明らかに殺害が明確になった人骨が発見されたので、防御性集落と言える。
●北の「防御性集落」は何故、出現したのか。		Ｔ：投げかける Ｐ：予想する	
●東北の古代史について復習をしよう。		Ｔ：投げかける Ｐ：調べる	●東北の古代史について、既習内容を確認する。 (確認させたい知識) ・律令国家による城柵の設置過程、前九年合戦、後三年合戦

・平安時代の青森県はどのような様子だったか。	(4)	T：発問する P：考える	・蝦夷が居住し、中央政府のあまり支配が及んでいない地域(郡制未設置)。
〈展開１〉 ●「北の防御性集落」の出現理由は蝦夷社会内部抗争が原因なのか。		T：発問する P：考える	●（「蝦夷社会内部抗争」説の根拠を調べて検討する）
・「蝦夷社会内部抗争」説の根拠は何か。	(5)	T：発問する P：調べる	・集落の分布が広範囲かつ山間部にまで及んでいることと政府の大軍が東北に攻め込むという事態は９世紀初頭で終わっていることを考慮すると蝦夷集団内での抗争が激化し、武力衝突も稀でない社会が到来したと考えられる。
・なぜ、この時期に蝦夷社会で内部抗争が起きたのか。	(6)	T：発問する P：考える	・新たな物流システムの形成の中で発展を遂げることができた富める集団と、システムから疎外された零落した集団との二極分化が進行し、対立が発生した。
〈展開２〉 ●北の「防御性集落」の出現理由は受領(国司)の苛政への対抗が原因なのか。		T：発問する P：考える	●（「受領(国司)の苛政への対抗が出現理由か」説の根拠を調べて検討する）
・「受領(国司)の苛政への対抗」説の根拠は何か。	(7)	T：発問する P：考える	・当時の地方支配の状況から、現地で北方支配に当たっていた人たちが、かなり露骨な交易搾取を実施し、そのことが緊張関係を生み出し、「国司苛政上訴」を発生させた。
・この時代(平安時代中期)の地方政治はどのような状況であったのか。		T：発問する P：考える	・都では藤原氏の摂関政治が行われており、中央政府は単に地方からの規定通りの税の納入さえあれば、その徴収手段については地方官である国司に委ねていた。
・この時代の東北は誰によってどのように支配されていたのか。	(8)	T：発問する P：調べる	・胆沢城や秋田城が第二の国府として蝦夷に北方の特産物を貢納させるかわりに本州の品物を提供するという交易体制によって統治されていた。
・「国司苛政上訴」の状況を示す他の事例は何か。		T：発問する P：考える	・尾張国の国司藤原元命が郡司百姓らに訴えられた事例がある。

〈展開３〉 ●「北の防御性集落」の出現理由は安倍氏・清原氏の北奥支配への対抗が原因なのか。		Ｔ：発問する Ｐ：考える	●（「安倍氏・清原氏の北奥支配への対抗」説の根拠を調べて検討する）
・安倍氏、清原氏とはどのような一族か。		Ｔ：発問する Ｐ：考える	・北奥を支配した地方豪族であり、安倍氏は前九年合戦で源頼義・義家親子に鎮圧され、清原氏は一族の内紛である後三年合戦で滅亡した。
・「安倍氏・清原氏の北奥支配への対抗」説の根拠は何か。	(9)	Ｔ：発問する Ｐ：調べる	・①防御性集落が分布する北奥羽(郡制未設置地域)の土器文化と安部・清原氏の支配地である中奥羽の土器文化が違うので、安倍氏・清原氏による直接支配や管理下になかった。 ・②青森市の新田(1)遺跡から多数の荷札木簡など中央国家や国府(国衙)の出先機関を想定させる遺物が多く出土している。また、この遺跡は強固な防御施設がない。これは北奥内部からの攻撃を受ける心配がないからである。これらから、この遺跡は安倍氏・清原氏ではなく中央国家に直結する国家の出先機関とみるべきである。 ・③安部氏が支配する岩手郡北部の防御性集落の終焉は 10 世紀末ないし 11 世紀初頭であり、それ以北の防御性集落より一足先に終わりを迎えている。この時期は『陸奥話記』に記載されている安倍氏が岩手北部を支配した時期とほぼ一致している。 ・④『陸奥話記』の記事で前九年合戦の際「鈍屋(かなや)・仁土呂志(にとろし)・宇曽利(うそり)三郡」の夷人の長として「安部富忠」が国府側につき、安部頼良(頼時)を打ち破っている。これは、青森県域の太平洋側は国府との関係が良好であるが、奥六郡の安倍氏とは確執があり、敵対関係であることを示す。

			・以上の４つの理由から、中央国家や国府と直結する北奥社会に対し、安倍氏・清原氏が常に北奥の産物や交易品を狙い、北奥の地で小競合いがあった。
・根拠④の「安部富忠」が長をしていた「鉚屋(かなや)・仁土呂志(にとろし)・宇曽利(うそり)三郡」とはどこの地域を指すのか。	(10)	Ｔ：発問する Ｐ：調べる	・国府に近い南から北へ書かれたとみるのが自然であり、共同出兵していることから３つの地域が隣接していると考えられる。最初に書かれた「鉚屋」が三部の中心勢力で、「安部富忠」が首長となっていた集団である。以上から、宇曽利は現在のむつ市と下北郡、仁土呂志は上北郡、鉚屋は八戸を中心とした地域と推測できる。
・八戸で「安部富忠」の拠点と考えられる遺跡はないか。		Ｔ：発問する Ｐ：考える	・林ノ前遺跡。この遺跡は、規模が他の遺跡よりも大きく首長居住区も設けられている。また、出土遺物も多彩で、殺されたと思われる人骨も発見されている。
〈展開４〉 ●「北の防御性集落」の終焉理由に関する２つの説を説明する。		Ｔ：説明をする Ｐ：説明をきく	●10 世紀後半から 11 世紀初頭にかけて消滅していく。その理由としては、①延久合戦(1070 年)によって中央政府の北方支配が進んだ、②12 世紀初頭に郡郷制が施行されることにより、北奥も中央政府の支配下になった。
●３つの解釈のうちどれを支持するか。その理由と他の解釈への疑問点・批判を考えよう。		Ｔ：投げかける Ｐ：考える	●レポートに自分が支持する解釈とその理由、他の解釈の疑問点・批判を考えて記入する。
●３つの解釈のどれが最も支持できるのか、討論をしよう。		Ｔ：投げかける Ｐ：同じ意見同士の班に分かれて討論を行う。	
・同じ解釈を支持する者同士で班をつくろう。		Ｔ：指示する Ｐ：班をつくる	
・班で話し合いをして、発表用紙を作成しよう。		Ｔ：指示する Ｐ：発表用紙を作成する。	・発表用紙に自班がその解釈を支持する理由と他の２つの解釈への疑問点・批判をまとめる。

・班ごとに発表用紙にまとめたことを発表しよう。 ・自分の班に出された疑問点や批判への答えを考えよう。 ・自分の班に出された疑問点や批判に答えよう。		T：指示する P：発表する T：指示する P：話し合う T：指示する P：発表する	・班のリーダーが話し合いでまとめた支持理由と他の解釈への疑問点・批判を発表する。 ・自分の班に出された疑問点や批判にどう答えるか協議する。 ・疑問点や批判に答える。一通り答えたら、各自の挙手による自由討論を行う。
〈終結〉 ●「北の防御性集落」は古代の東北史にとってどのような歴史的意義があると考えるか。		T：指示する P：レポートにまとめる	(レポート内容) ①討論を終えて、自分がどの解釈を支持するのか、その理由と他の解釈への疑問点や批判を書く。討論前と後で支持する解釈が変わった場合は、その理由も書く。 ②「北の防御性集落」の古代の東北史における歴史的意義について自分が支持した説を参考にして自分のことばで書く。

【学習資料】(紙数の関係で資料名と出典のみ記載)

(1)**東北北部・北海道南部の防御性集落跡分布図**　斉藤利男　2007「『北の古代末期防御性集落』の成立・発展・消滅と王朝国家」　『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館 pp. 52

(2)**防御性集落事例集**　三浦圭介・小口雅史・斉藤利男編　2006『北の防御性集落と激動の時代』同成社 pp. 260-261、263

(3)**林ノ前遺跡の概要**　(1)pp. 59

(4)**古代東北地方の城柵　石井進その他編**『詳説日本史Ｂ』　山川出版社 pp. 51

(5)**「蝦夷社会内部抗争」説①**　工藤雅樹　2001『蝦夷の古代史』pp. 186

(6)**「蝦夷社会内部抗争」説②**　樋口知志　1997「安倍氏の時代」『岩手史学研究』80 号

(7)**「受領(国司)の苛政への対抗」説**　小口雅史　2000「エミシからエゾへ北の防御性集落の時代再論」『青森県史研究』第５号 pp. 14

(8) **北の世界の新体制の準備～平安中期の東北支配の状況～**　小口雅史　2006「防御性集落の時代背景」『北の防御性集落と激動の時代』同成社 pp. 177

(9) **「安倍氏・清原氏の北奥支配への対抗」説**　三浦圭介　2006「古代防御性集落と北日本古代史上の意義について」『北の防御性集落と激動の時代』同成社 pp. 83-87

５．実験授業の考察

５－１　生徒は３つの解釈をどのように考察したのか。

生徒に討論前と討論後の２回、どの解釈を支持するのか、根拠も踏まえてレポートをまとめさせた。レポートにまとめられた３つの解釈の支持者数とその理由は以下の通りである。

表２　討論前における生徒の動向

※レポート提出数は 38 部。支持理由と疑問・批判は主なものを記載した。

解釈Ａ：「蝦夷社会内部抗争」説　　支持人数９名
〈支持する理由〉 ●記録に政府の蝦夷攻撃の記録が９世紀から残されていないから。 ●集落が広範囲かつ山間部まで分布しているというのは、周辺同士で争っていたと考えられる。
〈Ａ説への疑問・批判〉 ●集落間の抗争は、西日本と同様に弥生時代からあったのでないか。何故、平安時代になってからなのか。 ●広範囲の防御性集落で内部抗争というのは規模が大きすぎるのではないか。
解釈Ｂ：「受領官(国守)の苛政への対抗」説　支持人数７名
〈支持する理由〉 ●この時代は、各地方で国司による収奪が盛んに行われていた。それは、北東北においては同じである。また。北海道や北東北の特産物は貴重であり、役人たちの苛政は他地域よりも酷かったはず。
〈Ｂ説への疑問・批判〉 ●受領官への対抗ならば、その拠点である胆沢城や秋田城側に集落が集中的に分布してもいいのではないか。 ●北東北は他地域とは異なる交易体制で統治されているので、他地域と同様に国司による苛政が行われていたとは、単純に考えられないのではないか。
解釈Ｃ：「安倍氏・清原氏の北奥支配への対抗」説　支持人数 22 名
〈支持する理由〉 ●『陸奥話記』に詳細な記録が残っているから。 ●岩手県北部の防御性集落の消滅時期と安部氏によるこの地域の支配時期がほぼ一致していることから、安倍氏が北方支配を狙っていたことが明らかであるから。 ●安部・清原氏の支配地域の土器文化と青森県の土器文化が違うことから、文化の違いによる抗争があったのではないかと予想されるから。 ●林ノ前遺跡が前九年合戦で安部頼時と戦った安部富忠の拠点であった可能性が高いから。
〈Ｃ説への疑問・批判〉 ●『陸奥話記』の前九年合戦の記載には、太平洋側の戦いのものしかない。防御性集落は青森県全域に分布しているので、それをどのように説明するのか。 ●安倍・清原氏に対抗したものなら、遺跡が青森県南部に集中して分布するはずである。

１回目のレポート作成後に同じ説を支持する者同士でグループをつくらせ、討論を行った。討論は、①支持する説の根拠づくり、②他の説への批判・疑問を考える、③発表、④他の説への疑問・批判の発表、⑤自説への批判・疑問への応答、⑥自由討論という順序で行った。①と②の内容は班ごとに討論用発表用紙にまとめさせ、それを教師に提出後、発表させた。また、④の前に教師が各説に出された批判・疑問を一覧表にまとめて生徒に配布した。

討論後に再び自分がどの説を支持するのか、レポートにまとめさせた。その際に討論前と後で支持する説が変わった場合は、その理由を記載させた。また、自分が支持する説がより強固なものになるためにはさらにどのような根拠・証拠が必要なのか記載させた。討論後、支持する説が変わった生徒が６人いた。そのうち１人はＡ～Ｃの説ではなく、自ら考えた説を述べた。

◆Ｂ説から他説へ(４人)　※Ａ説への変更が３人、Ｃ説への変更が１人

(理由)Ｂ説には、具体的な文献史料や考古学的資料が少なすぎる。改めて集落の広範囲な分布をみると受領への対抗では説明しきれないから。

◆Ａ説からＣ説へ(１人)

(理由)C説を支持する各班の根拠が非常に論理的であり、かつ批判・疑問に対する返答が納得せざるを得ないような内容であったから。

◆C説から自説へ(1人)

(内容)「北海道の蝦夷たちに対する防御性集落」

(理由)防御性集落の分布が北部に集中している(特に下北地方にある)ので、内部抗争や南東北への防御ではなく、北の地域からの攻撃に備えたものであると思う。この時代では、刀伊の入寇という中国東北部の異民族の襲来もあった。そのような状況が北東北においてもあったのではないか。

上記の変更理由を見ると、支持説の実証性や論理性の不足を原因にしていることがわかる。また、自説を主張した生徒は遺跡分布図の再検討と通史学習で学んだ刀伊の入寇とを重ね合わせて自分の解釈をつくりあげた。大半の生徒は討論前と後で説を変えなかったが、討論を行うことによって、同じ説を支持する他の生徒の根拠に触れることができ、討論後では自説への根拠をさらに詳細にレポートにまとめていた。以上のことから生徒は、単に歴史研究者の説を受け入れたのではなく、討論を経ることにより、それを主体的に考えて自らの歴史観まで高めることができたと考えられる。

５－２　生徒は「北の防御性集落」の歴史的意義についてどのように考えたか。

討論後のレポートでは、「北の防御性集落」が古代東北史にとって、どのような意義があるのかを考察させた。これは、地域史と通史との関連性を生徒に捉えさせることを目的としている。以下は、レポートの中で多かった考えである。

◆生徒Ａ…古代の東北史にとって、青森県の文化の発達の遅れ具合を示し、さらには安部・清原氏と争っていたという意義があった。

◆生徒Ｂ…「北の防御性集落」は東国が用いた最後の抵抗といえるのではないか。

◆生徒Ｃ…東北が独自の文化を形成した地域であったということを示す遺跡である。

◆生徒Ｄ…中央の支配者や侵入者からの防衛、さらには地域の統率をはかるために重要だったと思う。

◆生徒Ｅ…当時の青森県(北東北)の技術、作物など他地域よりも政府側から魅力的であったことをあらわしている。

特に多かった考えは、生徒Ｂのような本州における蝦夷たちの最後の抵抗というものだった。「北の防御性集落」の歴史的意義については、歴史研究者の間でも様々な解釈がある。生徒は、通史学習で学んだ平安時代末期における奥州藤原氏の東北支配、その後の鎌倉幕府による支配を視野に入れて、生徒Ｂのような考えに至ったと思われる。また、生徒Ａのように青森県が後進的地域であったという考えも数名が記載していた。これは多くの生徒の認識の中に「青森県＝後進地域」というものがあることを意味している。ただ、数名の生徒は、自分が支持する説の根拠をさらに述べたり、支持しない説の批判を述べたりするなど、論旨がずれた内容を記載していた。

６．おわりに

本研究は、「開かれた歴史認識」の育成と地域史から通史を考察することを目的とした。実験授業を生徒はどのように感じたのか、生徒の感想文をいくつか紹介する。

◆生徒Ｆ…いつもの授業は受身の立場であるが、自分で考えてそれを発信するのも良いと思った。

◆生徒Ｇ…３つの意見に分かれて考えや批判を言い合うことで、違う視点から考えることや自分で気付かなかったことが知ることができました。

◆生徒Ｈ…お互いに意見を交わすことで、新たな疑問や結果が生まれ、どんどん考

えが広がりました。日本史は奥が深い学問だと思いました。

◆生徒Ｉ…とても楽しかった。もっと時間と資料があれば、発言する人もさらに増えて、活発な討論になったと思う。

◆生徒Ｊ…古代だけではなく、近世や近代の授業でもこのような授業をやってみたい。特に近代なら、もっと情報があって盛り上がると思う。

◆生徒Ｋ…青森県にも謎がある歴史が存在していることに驚きました。

◆生徒Ｌ…青森県の歴史は縄文・弥生時代以降、あまり知らなかったので、触れることができてよかった。

上記のような内容の感想を多くの生徒が書いていた。これらの感想文から生徒が受身ではなく、自分で歴史的解釈を選択し、それを討論のなかで他の生徒と意見をぶつけることにより、吟味・検討して自らの歴史認識を高めていくことができたと実感していることが読みとれる。また、地域史についての認識を高めることができたと思われる。以上から、当初の研究目的を多少は達成できたのではないか。しかし、残された課題は多数ある。第一に本研究では解釈批判学習と討論学習を融合させた授業を構成したが、その方法論が果たして妥当であったのかどうかをさらに綿密に再検討する必要がある。第二は生徒の感想文にもあるように、地域史を教材とした他の時代での単元開発の必要性である。地域史から日本史をみるためには、古代史だけではなく、その他の時代での学習も当然必要である。以上、残された課題は枚挙に暇がないが、これらを一つずつ解決していくことを今後の目標としたい。

【註】

１)加藤公明(2007)；『考える日本史授業３』地歴社　その他、加藤氏の一連の著書による

２)児玉康弘(2005)；『中等歴史教育内容開発研究』風間書房

３)戸田善治(2006)；「社会科における歴史認識の形成」『新時代を拓く社会科の挑戦』第一学習社

４)井上満郎(1991)；「地域学習と歴史教育」『歴史教育と歴史学』山川出版社

５)工藤清泰(1997)；「考古学研究における境界性－古代・中世への視点から－」『青森県史研究』一、井出靖夫(2002)；「北日本における古代環濠集落の性格とその背景－計量的分析からのアプローチ－」『唐川城跡－古代環濠集落の調査－』

６)工藤雅樹(2000)；『古代蝦夷』吉川弘文間、同(2001)；『蝦夷の古代史』平凡社、樋口知志(1997)；「安倍氏の時代」『岩手史学研究』80 号

７)小口雅史(2000)；「エミシからエゾへ北の防御性集落の時代再論」『青森県史研究』第５号、同(2006)「防御性集落の時代背景」『北の防御性集落と激動の時代』同成社

８)三浦圭介(2006)「古代防御性集落と北日本古代史上の意義について」『北の防御性集落と激動の時代』同成社、斉藤利男(1996)；「北緯四十度以北の十～十二世紀」『北の内海世界－北奥羽・蝦夷ヶ嶋と地域諸集団』山川出版社、同(2007)；「北の古代末期防御性集落」の成立・発展・消滅と王朝国家『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館

【参考文献】

宮原武夫(1998)；『子どもは歴史をどう学ぶか』青木書店

加藤公明(2000)；『日本史討論授業のすすめ方』日本書籍

坂井俊樹・浪川健治編(2009)；『ゆれる境界・国家・地域にどう向きあうか』梨の木舎

社会系教科教育学会編(2010)；『社会系教科教育研究のアプローチ～授業実践のフロムとフォー～』学事出版

七戸将光(2010)；「社会形成力を育成する中学校社会科の授業開発Ⅱ－小単元『戦争か平和か-高屋敷館遺跡の時代』の場合－」弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要第８号(通号第 18 号)